

対人認知における嫌悪感情の分析

——配偶者選好の視点から——

羽成隆司 河野和明 伊藤君男

1. はじめに

1-1. 配偶者選好に関する一般的傾向

本研究は、進化心理学的な視点から、対人認知場面で生じる感情の生起に内在すると思われる「配偶者選好」の影響を、「嫌悪感」という否定的感情に焦点を当てて検討する。なお、ここでは「配偶者」を恋人または結婚相手を指すものとして用いる。

これまで行われてきた配偶者選好に関する研究では、「理想の配偶者」という視点から、すなわち、どのような特徴を持った異性が配偶者として選択されやすいかを分析したものが多かった。もっとも代表的な進化心理学的研究の一つであり、37の文化を対象に質問紙調査を実施した Buss (1989) では、男性、女性いずれも、配偶者に求める特性として、優しさや思いやり、知性、健康等といった特徴を重視していること、一方、身体的魅力や経済力を重視する程度には性差が見られることが示されている。身体的魅力では女性より男性が、経済力では男性より女性が、強く重視するという特徴がある。

日本人大学生を対象として、配偶者にどのような特徴を求めるかを調査した河野・羽成 (2006) でも、Buss (1989) と類似の結果が確認されており、上記の傾向には通文化的な普遍性があると思われる。河野・羽成 (2006) では、収入、職業、学歴、真面目さ、意志の強さにおいては、男性よ

り女性が、スタイルの良さや顔立ちの良さにおいては、女性より男性が強く重視していることが示されている。

性差の特徴をまとめれば、女性は配偶者の経済力、野心、意欲を男性以上に重視し、一方、男性は配偶者の身体的魅力を女性以上に重視していると言える。

1-2. 対人嫌悪および嫌悪感の発生プロセス

上記のようにこれまでの研究により、「理想の配偶者」として重視される種々の特徴が明らかになってきた。

しかし、現実の対人場面では、理想通りの配偶者を選択できるとは限らない。理想通りの相手と簡単に出会えるわけではないし、たとえ出会えたとしても、相手が自分を好んでくれなければ、配偶者にはできない。また、好ましい特徴を持った異性を獲得するには、同性間の競争も厳しいものになる。むしろ、理想通りの異性を配偶者にできる可能性の方が低いと言ってよい。そのため、現実の配偶者選択場面では、一定の範囲内で妥協する戦術、つまり、理想通りというよりも「嫌いではない対象者」の中から、理想に近い相手（最も嫌いではない相手）を選ぶ」という戦術をとることが多くなるであろう。したがって、配偶者選択には、「望ましくない異性を避ける」という行動が内在していると考えられる。

以上から、配偶者選択には、「好ましい」と感じるだけではなく、「嫌だ」「避けたい」という感情

が重要であることがわかる。

対人場面に限らず、望ましくない対象を避けようとする際には、嫌悪的な感情が生起する。Rozinらは、嫌悪感の進化過程を次のように理論化している。嫌悪感のもっとも基礎にあるのは、“まずい味”への嫌悪であり、続いて“中核的嫌悪”（食物、摂食、糞尿等の排泄物、動物等への嫌悪）、動物的性質への嫌悪（性・死・不衛生・奇形や毀損された外面への嫌悪）へと進化していったと指摘する。さらに、これが、“対人嫌悪”（直接的あるいは間接的によそ者や望ましくない人と接触することへの嫌悪）、“道徳的嫌悪”（特定の道徳違反への嫌悪）へと進化する。これらの嫌悪感自身や所属する社会を守るための適応的な意義を持つ。まずい味への嫌悪は毒物から、中核的嫌悪は病気や感染から、動物的性質への嫌悪は死から、それぞれ身体を守るための行動を動機づけるために生起する感情ということになる。対人嫌悪や道徳的嫌悪も、自身や社会の秩序を守るために機能する感情と位置づけられる（Rozin, et al., 1994, 1997, 2000）。このように嫌悪感には適応上非常に重要な役割を持っていると考えられるが、データ収集の難しさなどの理由もあって、嫌悪感をテーマとした研究は必ずしも十分ではない（Bloom, 2004）。

1-3. 本研究の目的

本研究では、異性との対人場面は、配偶者選択の可能性を内在していると仮定する。したがって、その際に生じる嫌悪感も、配偶者として望ましくない特徴の認知によって喚起されるものと考えられる。そして、その嫌悪感には、男性よりも女性においてより強く現れるのではないかと予想される。なぜならば、配偶者選択の失敗は、妊娠、出産、育児を伴う女性にとってより大きな負担となるからである。

本研究では、一般に配偶者として望ましくない特性を持った人物を想定し、彼らに対する嫌悪感

情を分析した。具体的には調査対象者が実際に嫌悪している男性と女性、および、8種のスティグマの特徴を持った男性と女性について、嫌悪感および好感の程度を測定した。また、一般的嫌悪事象における性差についても、先行研究と同様の傾向が認められるかどうかを確認した。そして、これらの諸結果から、異性を中心とした対人場面における嫌悪感の特徴について検討を行った。

2. 方法

2-1. 調査対象

大学生228名（男性101名、女性127名）を調査対象とした。平均年齢は、20.56（標準偏差2.27）歳であった。

2-2. 質問紙の構成

質問紙は、3部から構成されていた。第一部は、実在の嫌悪的な人物（男性、女性各1名）にたいする感情評定、第二部は、スティグマの特徴を持つ人物にたいする感情評定であった。第三部は、Haidt, et al. (1994) による嫌悪感尺度を日本語訳したものへの評定であった。嫌悪感尺度質問紙は、一般的な嫌悪感情の程度を確認するためのものである。

実在の嫌悪的な人物は、調査対象の身の回りに実在する嫌悪的な男性と女性を一人ずつ想起させ、それぞれのイニシャルまたはその人物を示唆するキーワードを該当箇所に記入させた。

スティグマの特徴を持つ人物として、下記の8種を設定した。

- (1) 片腕がない、自分と同世代の男性と女性
- (2) 知的障害のある、自分と同世代の男性と女性
- (3) 顔のほとんどの部分に重度のやけど痕のある自分と同世代の男性と女性
- (4) 同性愛者の自分と同世代の男性と女性

- (5) 子どもを虐待死させたことのある自分と同世代の男性と女性
- (6) 生まれつきすぐく顔が醜い自分と同世代の男性と女性
- (7) カード破産をした自分と同世代の男性と女性
- (8) よぼよぼになった高齢者の男性と女性

上記は、健康である、知的である、身体的魅力がある、子ども好きである、経済力がある、若いといった配偶者として好ましい特徴とされる内容 (Buss, 1989) と反対の特徴に相当するものの中から、想像しやすい属性を中心に選んだものであった。

実在の嫌悪的人物と、想定したスティグマ的特徴を持つ人物について求めた感情評定項目は、嫌悪感と好感であった。主たる分析の対象は「嫌悪感」であるが、嫌悪感の程度を回答する際に生じる回答抑制の可能性を考慮し、逆転項目として「好感」も設定した。いずれも7段階評定であった。

また、Haidt, et al. (1994) による嫌悪感尺度は、32項目からなり、順に4項目ずつ、食べ物 (food)、動物 (animals)、身体から排出されたもの (body products)、セックス (sex)、身体の破損 (envelope violations)、死 (death)、衛生状態 (hygiene)、迷信的思い込み (magic thinking) の8カテゴリから構成されていた。各回答の得点をカテゴリごとに合計したものをそのカテゴリに対する嫌悪傾向の指標とした。実際の質問項目は、本論文の末尾に資料として付した。

2-3. 手続き

大学の授業時間を利用して質問紙調査を集団実施した。

実施に先立ち、倫理的配慮として、質問紙の概要、および、回答が任意である旨の説明を詳しく行った。具体的には、マイノリティ、社会的弱者、障害者などに対する印象を問う項目が多数あること、回答すること自体が不快感を喚起する可能性

があること、特に身近にこのような人がいる場合に気分を害する可能性があること、回答はあくまで任意であり、途中で中止することも可能であることを強調した。これらは質問紙の表紙にも記述されていた。

3. 結果と考察

3-1. 各種状況における一般的嫌悪感情

図1は、8つの嫌悪状況カテゴリにおける嫌悪感の平均値である。全般に女性の方が嫌悪得点が高くなっている。分散分析を行った結果、食べ物、セックス、衛生状態を除く5つのカテゴリ、および合計得点で女性の方が男性より有意に高かった。先行研究でも女性の嫌悪感の強さは指摘されているが (Olatunji, et al., 2005; Druschel and Sherman, 1999)、これと同様に、本研究の調査対象においても、一般に女性の方が男性より高い嫌悪感を示すことが確認された。

3-2. 実在人物、および、スティグマ特性を持つ想定人物に対する感情

表1は、実在人物、および、スティグマ特性を持つ想定人物に対する感情を、回答者と対象者の性別に示したものである。

嫌悪感について分散分析を行った結果を以下に示す。なお、回答者の性別に下位検定を行った結果は表中にも示した。

実在の人物への嫌悪感、全般にスティグマ特性の人物よりも高い。しかし、回答者の性、対象者の性、いずれも有意差は見られなかった。

スティグマ特性を持つ対象について、回答者の性と対象者の性の間に有意な交互作用が見られたのは、「醜い顔」($F = 17.93, df = 1, 226, p < .0001$)、「同性愛者」($F = 14.34, df = 1, 226, p < .0001$)、「高齢者」($F = 5.85, df = 1, 226, p < .05$)であった。

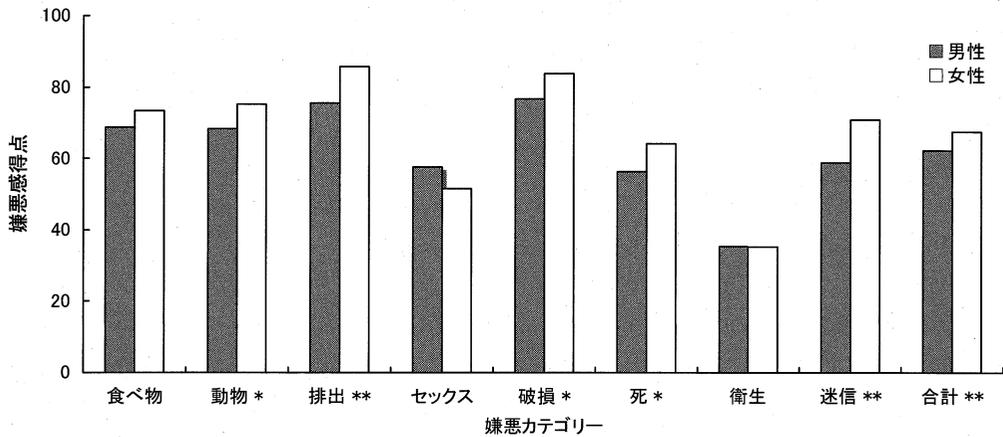


図1. 一般的嫌悪状況における嫌悪感の程度

** $p < .001$, * $p < .05$

「醜い顔」については、男女ともに同性よりも異性に対して有意に強い嫌悪感を持っている。一方、「同性愛」については、男性のみが同性である男性に対して有意に嫌悪感が強い。「高齢者」については、男性のみが異性に対して有意に強い嫌悪感を持っている。

「片腕」($F = 3.92$, $df = 1, 226$, $p < .05$)、「知的障害」($F = 26.37$, $df = 1, 226$, $p < .0001$)、「火傷痕」($F = 19.27$, $df = 1, 226$, $p < .0001$)については、「醜い顔」で見られたような交互作用はなく、男女回答者いずれも、女性対象者よりも男性対象者に対して強い嫌悪感を持っている(片腕： $F = 3.92$, $df = 1, 226$, $p < .05$ ；知的障害： $F = 26.37$, $df = 1, 226$, $p < .0001$ ；火傷痕： $F = 19.27$, $df = 1, 226$, $p < .0001$)。

「虐待者」と「カード破産者」については、対象者の性に関わりなく、女性回答者の方が男性回答者よりも嫌悪感が強く、回答者の性の主効果のみが有意であった(虐待者： $F = 9.24$, $df = 1, 226$, $p < .01$ ；カード破産者： $F = 10.77$, $df = 1, 226$, $p < .01$)。なお、虐待者の評定値は他のスティグマ特性よりかなり高く、実在人物と同じ程度であった。これは、本研究で想起を求めた虐待者は、自

身の子どもを死なせた犯罪者でもあり、倫理的観点から強い批判を向けやすい対象として評価されたことによるのかもしれない。

好感については、以下の特徴が見られた。

実在の人物について、対象者の性に有意な差が見られた($F = 15.59$, $df = 1, 224$, $p < .0001$)。下位検定の結果、女性において男性に対する好感の程度がより小さいことがわかる。

回答者の性と対象者の性の間に有意な交互作用が見られたのは、「片腕」($F = 4.52$, $df = 1, 226$, $p < .05$)、「火傷痕」($F = 7.88$, $df = 1, 226$, $p < .01$)、「同性愛者」($F = 4.35$, $df = 1, 226$, $p < .05$)、「醜い顔」($F = 19.09$, $df = 1, 226$, $p < .0001$)、高齢者($F = 3.94$, $df = 1, 226$, $p < .005$)であった。これらのスティグマ特性についての下位検定の結果を見ると、女性回答者では、対象者の性による好感の程度の違いは明確でないが、男性回答者では、「片腕」と「醜い顔」において、女性対象者への好感の程度が明らかに低いことがわかる。さらに、有意ではないものの、「知的障害」、「火傷痕」、「高齢者」においても女性対象者への好感の程度が低いという同様の傾向が伺われる。

以上の結果を総合すると、男性回答者において、異性対象者に対する嫌悪感（好感の低さも含む）がとくに生じやすいと考えられるスティグマ特性は、「醜い顔」であった。また、嫌悪感、好感いづれかで有意差が見られた「片腕」と「高齢者」も、これに準ずるスティグマ特性と考えられる。これら3つはいずれも外見に現れる身体的特徴を示すという点で共通している。

なお、「同性愛」については、男性回答者でのみ、同性への嫌悪感（好感の低さも含む）が強いとい

う上述のスティグマ特性とは逆の傾向が見られた。男性の同性愛者は男性を恋愛対象とするわけであるから、男性回答者にとっては同性である男性を恋愛対象と仮定して、反応していた可能性がある。このように考えると、男性の同性愛者へのより強い嫌悪感も、上述した3つのスティグマ特性と同じく、外見に現れる身体的特徴にもとづくものであると解釈できる。

一方、女性回答者は、男性回答者に比べると一貫した傾向がややとらえがたい。「片腕」、「知的

表1 各スティグマ特性に対する感情評定平均値

** $p < .01$, * $p < .05$

		嫌悪感			
		男性回答者		女性回答者	
		対象		対象	
	対象	男性	女性	男性	女性
	片腕	2.08	2.01	片腕*	2.29 2.02
	知的障害*	3.98	3.59	知的障害**	3.87 3.33
	火傷痕	3.31	2.99	火傷痕**	3.58 2.95
	同性愛**	4.06	2.53	同性愛	2.6 2.8
	虐待者	6.11	6	虐待者	6.54 6.46
	醜い顔**	3.38	3.79	醜い顔**	3.87 3.44
	カード破産	3.5	3.46	カード破産	4.4 4.13
	高齢*	2.59	2.88	高齢	2.52 2.41
	実在人物	6.25	5.72	実在人物	6.37 6.55
		好感			
		男性回答者		女性回答者	
		対象		対象	
	対象	男性	女性	男性	女性
	片腕**	3.41	2.99	片腕	3.48 3.41
	知的障害	3.61	2.55	知的障害	2.76 2.87
	火傷痕	2.96	2.68	火傷痕	2.92 3.06
	同性愛*	2.5	2.88	同性愛	3.29 3.29
	虐待者	1.38	1.43	虐待者	1.25 1.43
	醜い顔**	2.9	2.29	醜い顔	2.63 2.73
	カード破産	2.25	2.19	カード破産	2.06 2.21
	高齢	3.32	3.05	高齢	3.66 3.71
	実在人物	1.62	1.8	実在人物**	1.45 1.9

障害」、「醜い顔」については異性対象者への嫌悪感が強いが、好感ではいずれもその差はほとんどない。さらに、「知的障害」は、男性回答者でも女性対象者より男性対象者への嫌悪が強かったので、この特性に対する嫌悪は同性か異性かという違いとは別の要因が関係しているのかもしれない。

4. 結 論

3-1で言及したように、本研究でも、女性は男性より一般的な嫌悪事態において敏感に反応することが確認された。しかし、3-2の結果から、嫌悪感の喚起は、対象によって異なる様相を見せることが明らかとなった。女性が男性よりも常に強い嫌悪感を示すわけではなく、対人場面では、その人物の諸特徴（性やスティグマ特性）によって大きく異なるのである。これは、異性との対人場面は、配偶者選択の可能性を内在しているとする本研究の仮定の妥当性を支持するものである。すなわち、いくつかのスティグマ特性について、異性に対するより強い嫌悪感が認められた。とくに、男性回答者において、外見に関わるスティグマ特性を持つ異性に対してより強い嫌悪感が確認されたことは、男性の方が女性より配偶者の身体的魅力を重視するというBuss (1989, 1998) や河野・羽成 (2006) らの結果とも合致する。

しかし、異性に対する嫌悪感が、男性よりも女性においてより強く現れるのではないかというはじめに提示した本研究の仮説と一致する特徴は必ずしも明瞭ではなかった。

今後検討すべき課題として、本研究で用いた嫌悪感の指標が適切であったかどうかという問題がある。単に嫌悪感や好感といった感情評定を求めるのではなく、より具体的なコミュニケーション場面を想定して、直接または間接的な身体接触がどこまで可能かという指標を用いる手段が有効か

もしれない。身体接触はコミュニケーションの基礎をなすものであり、より直接的な感情喚起をもたらしやすいからである (Hertenstein, et al., 2006)。

一方、嫌悪感を検討するために本研究ではそのまま「嫌悪感」および「好感」を用いたが、否定的な感情を示す他の語（かわいそう、軽蔑など）も設定して、側面から回答者の感情を分析する手段も考えられる。今後は指標の再検討を行い、あらためてデータの収集と分析に当たりたい。

引用文献

- Buss, D. M. (1989) Sex differences in human mate preferences: Evolutionary hypothesis tested in 37 cultures. *Behavioral and Brain Sciences*, 12, 1-49.
- Buss, D. M. (1998) The psychology of human mate selection: Exploring the complexity of the strategic repertoire. In C. Crawford and D. Krebs (Eds.) *Handbook of evolutionary psychology*. pp. 405-429, Mahwah: New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Bloom, P. (2004) Descartes' Baby: How the Science of child development explains what makes us human. 春日井晶子訳 (2006) 赤ちゃんはどこまで人間なのか: 心の理解の起源. ランダムハウス講談社.
- Druschel, B. A., and Sherman, M. F. (1999) Disgust sensitivity as a function of the Big Five and gender. *Personality and Individual Differences*, 4, 739-748.
- Haidt, J., McCauley, C., and Rozin, P. (1994) Individual differences in sensitivity to disgust: A scale sampling seven domains of disgust elicitors. *Personality and Individual Differences*, 16, 701-713.
- Hertenstein, M. J., Verkamp, J. M., Kerestes, A. M., and Holmes, R. M. (2006) The communicative functions of touch in humans, nonhuman primates, and rats: a review and synthesis of the empirical research. *Genetic, Social, and General Psychology Monographs*, 132, 5-94.
- 河野和明・羽成隆司 (2006) 惚れっばい人の配偶者選好. 日本心理学会第70回大会発表論文集.
- Olatunji, B. O., Sawchuk, C. N., Arrindell, W., and Lohr, J. M. (2005) Disgust sensitivity as a mediator of the sex difference in contamination fears. *Personality and Individual Differences*, 38, 713-722.
- Rozin, P., J. Haidt, McCauley, C., and Imada, S. (1997) Disgust: The cultural evolution of a food-based emotion. In Helen Macbeth (Ed.), *Food preference and taste: continuity and change*. Providence, Oxford: Berghahn Books. pp. 65-82.
- Rozin, P., Haidt, J., and McCauley, C. (2000) Disgust. In M.

Lewis, & S. M. Haviland-Jones (Eds.), *Handbook of emotions, 2nd edition.* (pp. 637-653). New York: Guilford Press.

Rozin, P., Markwith, M., and McCauley, C. R. (1994) The nature of aversion to indirect contact with other persons: AIDS aversion as a composite of aversion to strangers, infection, moral taint and misfortune. *Journal of Abnormal Psychology, 103*, 495-504.

はなり・たかし / 文化情報学部准教授

E-mail: hanari@sugiyama-u.ac.jp

かわの・かずあき / 東海学園大学人文学部准教授

いとう・きみお / 東海学園大学人文学部准教授

資料

Haidt, et al. (1994) による嫌悪感尺度 (日本語訳)

- (1) 私は、何らかの状況の下なら、猿の肉をよるこんで食べるだろう。1. はい 0. いいえ
- (2) 誰かがレストランで、手づかみで食べ散らかすのを見ると嫌な気持ちになる。1. はい 0. いいえ
- (3) だれかがケチャップをバニラアイスクリームにぬって食べるのを見る。2. 非常に嫌 1. やや嫌 0. 全然嫌でない
- (4) ミルクを飲もうとしたら、腐っている匂いがした。2. 非常に嫌 1. やや嫌 0. 全然嫌でない
- (5) ネズミが公園の道を横切って走るのを見ると嫌な気持ちになるだろう。1. はい 0. いいえ
- (6) 他の誰かの家でゴキブリを見ても、私は嫌な気持ちにならないだろう。1. はい 0. いいえ
- (7) 戸外のゴミバケツの中の肉片にウジ虫を見つめる。2. 非常に嫌 1. やや嫌 0. 全然嫌でない
- (8) コンクリートの上を素足で歩いて、ミミズを踏んでしまう。2. 非常に嫌 1. やや嫌 0. 全然嫌でない
- (9) だれかがのどに詰まった痰を吐く音を聞くと嫌な気持ちになると思う。1. はい 0. いいえ
- (10) だれかが嘔吐するのを見ると、胸がむかつくと思う。1. はい 0. いいえ
- (11) 公衆便所で大便が流されずに残っているのを見る。2. 非常に嫌 1. やや嫌 0. 全然嫌でない
- (12) 鉄道下のトンネルを歩いて通って抜ける間、尿のおいがする。2. 非常に嫌 1. やや嫌 0. 全然嫌でない
- (13) 同性間のセックス行為は不道徳だと思う。1. はい 0. いいえ
- (14) 人が動物に性的な快楽を求めるのは不道徳だと思う。1. はい 0. いいえ
- (15) 自分の父親とセックスしたことがある成人女性について聞く。2. 非常に嫌 1. やや嫌 0. 全然嫌でない
- (16) 80歳の女性との性関係を求める30歳の男性のこについて聞く。2. 非常に嫌 1. やや嫌 0. 全然嫌でない
- (17) 理科の授業で人間の手が瓶に保存されているのを見ると嫌な気持ちになるだろう。1. はい 0. いいえ
- (18) ガラス製の義眼をつけている人が目から義眼を外すの

を見て、私は全く動揺しないだろう。1. はい 0. いいえ

- (19) 事故で釣り針が指を貫いてしまった人を見る。2. 非常に嫌 1. やや嫌 0. 全然嫌でない
- (20) 事故の後で腸が露出している男を見る。2. 非常に嫌 1. やや嫌 0. 全然嫌でない
- (21) 死体に触れるとぞっとする。1. はい 0. いいえ
- (22) 墓地を歩いて通るのをわざわざ避けようとする。1. はい 0. いいえ
- (23) 友人の飼った猫が死んで、あなたが素手で死体を拾わなければならない。2. 非常に嫌 1. やや嫌 0. 全然嫌でない
- (24) 火葬にされた人の灰に偶然触れる。2. 非常に嫌 1. やや嫌 0. 全然嫌でない
- (25) 身体のだんな場所も公衆便所の便座に触らないようにする。1. はい 0. いいえ
- (26) 私は、好きなレストランでもコックが風邪を引いていることがわかったら、そこには行かないだろう。1. はい 0. いいえ
- (27) ソーダを一口飲んだ後、そのコップは知人が飲むのに使っていたものと気がついた。2. 非常に嫌 1. やや嫌 0. 全然嫌でない
- (28) 友人が1週間に一度だけしか下着を替えられないことになんか気がつく。2. 非常に嫌 1. やや嫌 0. 全然嫌でない
- (29) 空腹であっても、ハエたたき (使用済みだがよく洗ったもの) でかき回した好物のスープを飲まないだろう。1. はい 0. いいえ
- (30) 快適なホテルの部屋でも、前夜にその部屋で人が心臓発作で死んだのを知っていたなら、気持ちが悪くて眠れないだろう。1. はい 0. いいえ
- (31) 友人が犬のウンチのような形のチョコレートをあなたに勧める。2. 非常に嫌 1. やや嫌 0. 全然嫌でない
- (32) 性教育の授業の中で、新しいコンドームを口でふくらますよう求められる。2. 非常に嫌 1. やや嫌 0. 全然嫌でない